

職場にユーモアとジョークを

青森中央学院大学
学長 花田 勝美



ユーモアとジョークの違いをご存じだろうか。ものの記述によればユーモアとは人の心を和ませるような笑いをいい、ジョークとは冗談や洒落による笑いを意味するという。今から30年も昔の話になるが、今日でもなお忘れがたいユーモアを体験した。若かりし頃の私は（今はその面影すらないが）2年間の米国留学の機会を得た。しかも、留学先は思いもよらない、ハーバード大学のマサチューセッツ総合病院、ウエルマン光医学研究所。今でこそ一般に知られるようになったが、治療用レーザーの開発や太陽紫外線障害の基礎的研究では世界をリードする研究所であった。どんなに偉く、どんなに厳しく、どんなに恐ろしい人達がいるのだろうかと戦々恐々としていた。そんな状況では胸を張って仕事ができるはずもなく、案の定、皆が熱心に実験をしている最中に、床の水に足を滑らせ危うく放射性物質入りの容器を落としそうになったのである。十数名の研究者は一斉に怖い目でこちらをみた。いや、睨みつけた。当然である。もし、容器が割れて放射性物質が床に散ったらその部屋は使用できなくなるからである。いたたまれない時が経過したとき、実験室のリーダー格であった英国からの研究者が、「Dr. 花田はいま“ノーム (gnome)”をみたんだよ。だから踏みつけないように足を上げたのさ」と穏やかに話してくれた。直後に皆が納得し、和やかな雰囲気変わった。キョトンとしていたのは自分だけ。“ノーム”ってなんだ？なんで急に笑顔になったのか？理解できなかったのである。その日の夕刻、

さっそくボストンの書店でノームの本を買って読み全てが理解できた。ノームとは昔から世界中に広く生息しているといわれる伝説の小人であった（アイヌのコロポックル伝説もそのひとつと思われる）。子供には見えるが、大人では純真な心の持ち主にしか見えないというのである。実験室の皆ももしも「見えない」といえば純真な大人でなくなるのである。これこそがユーモアだと気付いた。さすが英国紳士と合点した。ついでに述べておきたいが、当時めずらしく日本の落語家の一団がボストンを訪れた。日本語を勉強しているという友人ポールを伴って出かけた。その折、ある落語家が、「いまから、この世のものとも思われぬ最も短い落語を話します。いいですか！」といい、「あのよっ」とだけ云ったのである。もちろん、日本人の多くはどっと笑いの渦に包まれた。しかし、ポールは笑えなかった。「この世」と「あの世」をかけたジョークを理解できなかったのである。西洋型の笑いとは日本型の笑いの違いを感じたひと時であった。

最近、企業を挙げて「健康経営」が推し進められている。本学の看護学部も「ドイツ式健康ウォーキング」を通して企業の健康活動に貢献している。健康には身体に加えて心の健康も問われる。一つのユーモアは職場の雰囲気を一変する力がある。私の部屋には「花には水を、人には愛を、人生にはユーモアを」の名言を掲げてある。かつて、自分が助けられたようなセンスある「ユーモア」をいつか、誰かにお返ししてみたいものである。